

農業技術リーダー



東信地域の野菜振興と試験研究の取り組み

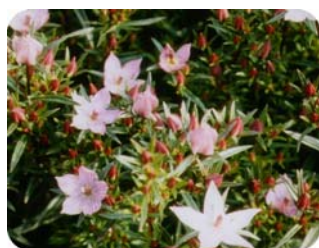
営農技術センター所長 橋場 悠次

東信地域は、北は浅間山、南は八ヶ岳に囲まれた県下最大の野菜産地で、レタス、ハクサイ、キャベツなどの基幹品目をはじめ、チンゲンサイ、ブロッコリー等、多品目の野菜が栽培されています。また、薬用になじん、センブリ等の地域特産物は全国的にも有数な産地となっています。

しかし、産地が大きく、歴史が古い反面、土壌病害や土壌養分のアンバランスに起因すると思われる連作障害の発生が多く見られ、このまま放置すると将来産地の存続にかかわるような問題となる恐れがあります。



薬用になじんの地上部



ムラサキセンブリの花

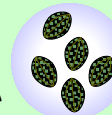
このため、特にレタスの根腐病に対して当センターでは、レタス根腐病総合防除対策プロジェクトの一翼を担い、育苗方法と土壌管理方法の改善による発病軽減技術の開発と現地圃場における実証試験に取り組んでいます。

また、環境にやさしい農業の推進にあたっては、有機質肥料を活用し、化学肥料や農薬の使用量を減らすことができる野菜栽培技術の確立に向けて、現地試験を実施しています。さらには、地域で生産された野菜を有利に販売するため、関係機関との共同研究で、人工衛星によるリモート・センシング技術とコンピュータによるデータ解析技術を組み合わせた野菜の生育・収量予測システムの開発に取り組み始めました。

今後、国内外の産地間競争は一段と厳しさを増すと思われますが、野菜産地を守り、育てていくためには、今までにも増して農家、関係機関、試験場が一体となり、課題解決のペースを上げていくことが必要と感じています。



長野県が生産量全国一位をほこるレタスの全面マルチ栽培(南佐久郡川上村にて)



小麦「東山33号」

農 事 試 験 場

収穫期が6月中下旬で、耐寒性に優れ、耐倒伏性が強く、積雪地帯を除く、標高700m以下の地帯に適する品種です。

「東山33号」の粉で作る「うどん」は、明るい白色で、もちもちしており、歯ごたえがあります。これは粉の中のもち性デンプンの含有割合が高いため、これまでのうどんとは異なった食感が楽しめます。

この特長を生かし、有用な転作作物として導入し、うどんを特産化しようとする動きがあります。



東山33号(左) シラネコムギ(右)



うどん適性をみるための食味試験

ぶどう「ブドウ長果1」

果 樹 試 験 場

「巨峰(四倍体品種)」と「ロザリオビアンコ(二倍体品種)」を交配し、通常では育たない三倍体の幼胚をバイテク技術により育てあげた三倍体のぶどう品種です。

栽培面では完全無核化と果粒肥大促進のためにジベレリン処理を必要としますが、果実の品質は、「黒紫色」、「大粒」、「種なし」、「良食味」、「丸かじり(皮ごと食べられる)」というキーワードがぴったりあてはまり、多くの消費者の感性にかなうものと期待されています。



ブドウ長果1

はくさい「長・野交25号」

野 菜 花 き 試 験 場

黄化病抵抗性キャベツとの種間交雑に由来する秋どり栽培用の耐病性F₁品種です。黄化病に対して発病遅延型の耐病性をもち、根こぶ病にも抵抗性があり



はくさい「長・野交25号」

ます。また、べと病、白さび病などの病害にも強い優良品種です。

この品種は、やや晩生で抽だいがやや早い傾向があり、寒地の早まき栽培には適しませんが、球の形状がやや縦長で、葉柄中肋の張りが小さく薄く、球内色が黄色であるため、キムチ漬けの材料としての用途が期待されています。

ケール「長・野交26号」

野 菜 花 き 試 験 場

欧州産の食用スコッチケールとキャベツ品種YRSEの親系統であるYR-SとのF₁組み合わせからできた品種です。

葉の形態はスコッチケールとキャベツの中間で、緩やかな縮(ちぢみ)があります。低温期には葉脈部分が薄紅色になります。結球せず、葉が大きくなり次第収穫するので、収穫期間が3ヶ月程度と長く、収量も10aあたり4~8tとれます。

ジュース原料としては、従来のケールに比べて苦味や青臭さが少ないといった特徴があります。



ケール「長・野交26号」

キャベツ「長・野交27号」

野 菜 花 き 試 験 場

高温期の結球性に優れ、寒地・寒冷地の8月に収穫できるタイプのキャベツです。雨量が多いと発生が助長される黒腐病に対して耐病性があり、萎黄病には「YRSE」と同程度の抵抗性があります。また、熟期は中生です。

葉色は「YRSE」より濃く、「若峰」より淡い色を呈し、食味は良好です。



キャベツ「長・野交27号」

ぶなしめじ「長菌11号」

野 菜 花 き 試 験 場

現在栽培されている品種「宝3号」は、食味がよいものの、培養・熟成期間が長く、傘がひらきやすくて欠け

やすいといった短所をもつため、培養・熟成期間が短く、高収量で品質の高い品種の育成が望まれていました。

「長菌11号」は、菌かきから収穫までの生



ぶなしめじ「長菌11号」

育期間が「宝3号」より2～3日長いものの、培養・熟成期間が「宝3号」より20～30日短く、収量が15%程度多いこと、茎の接着が少なく、苦味がきわめて少ないこと等の長所を兼ね備えており、これからの品種として期待されています。

ソルガム「東山交22号」 畜産試験場

近年、ソルガムの品種改良では、高消化性遺伝子を用いた新品種の開発が進められています。畜産試験場でも平成9年に「葉月」を育成し、早生のロールバールサイレージ用として普及しつつあります。

「東山交22号」は、「葉月」と同じ高消化性遺伝子を持ち、晩生・多収で耐倒伏性に優れるサイレージ用品種です。茎葉部の消化性とサイレージの嗜好性は「葉月」なみに優れ、晩生で穂重割合が低いことから、相対的に鳥獣害の影響も少ないと考えられます。



ソルガム「東山交22号」

そのため、ロールバールサイレージ用として普及しつつある「葉月」に加え、労働力の分散、作業体系の拡大及び鳥獣害の軽減などの点から年1回利用のサイレージ用品種として期待されます。

高能力種雄牛トリオ 「勝正福」、「紋寿郎3」、「安茂桜」 畜産試験場

全国トップレベルの高能力黒毛和種種雄牛を紹介します。

「勝正福」は、脂肪交雑、バラの厚さ及び枝肉歩留りの遺伝能力が特に優れており、肥育素牛生産に使います。



肥育素牛生産に有望な「勝正福」

「紋寿郎3」は、ロース芯面積、脂肪交雑及び枝肉重量の遺伝能力に優れており、肉量及び肉質を兼ね備えた種雄牛です。

「安茂桜」は、脂肪交雑が特に優れており、そのばらつきも小さいので脂肪交雑の改良効果が期待されます。肥育素牛生産のほか種畜の生産にも適しています。

大豆「東山187号」 中信農業試験場

小粒で納豆用に開発された大豆の新品種です。6月上旬播種で10月上旬に収穫できるため、長野県下全域で栽培が可能です。県内で多発するダイズモザイク病に強く、褐斑粒といわれる障害粒の発生がありません。倒伏が少なく莢がはじけにくいので、コンバイン収穫に適し、収量も従来の小粒品種より優れています。ただし、ダイズシストセンチュウには弱いので、連作は避ける必要があります。



ナカセンナリ
(普通品種)

東山187号
(納豆用新品種)

納豆小粒
(納豆用既存品種)

「東山187号」の納豆は、従来品種と同等以上の味です。平成13年から長野県で「東山187号」の本格的な栽培が始まり、これからは県で育成した品種である「東山187号」を原料にした小粒納豆が製造・販売できるようになります。

薬用にんじん「信夢311号」 営農技術センター

薬用にんじんの品質評価では、含まれる機能性成分とともに、根の形状と重量が重要な要素です。特に形状については、根の胴部(主根部)が長く、太いこと、全体のバランスがとれていることが望まれます。

「信夢(しんさん)311号」は、これらの点を改良目標に育成した品種です。従来から栽培されてきた在来種に比べ、胴部が長く、太いのが特徴で、一本重も在来種より優れています。上位等級比率の向上、収量の増加により、所得の向上が期待できます。



みまき(在来種)

信夢311号

農業関係試験場で開発した 新技術の紹介

詳しい内容は各場へお問い合わせください。



「レタス収穫機」の開発

農業総合試験場

現行のレタス収穫作業は、長時間にわたり腰を曲げる姿勢で行われています。また、レタスは軟弱野菜です。これまで機械による収穫は困難でした。このような問題を解決するため、レタスを傷つけずに収穫でき、しかも作業者が立った姿勢で楽に作業ができる収穫機を開発しました。

収穫機は15馬力程度のトラクタ(全面マルチャ用トラクタを推奨)に直装するタイプです。運転はトラクタ車輪をうね間に入れて無人で微速走行させます(写真1)。

水平ほ場では、この収穫機により、深切りや損傷なしでレタスを切り取り、搬送することができます(表1)。



写真1 レタス収穫機の作業状況(前方)

表1 レタス収穫機の切り取り・搬送精度(場内試験)

作業速度 (m/秒)	調製処理時間 (秒/1球)	出荷可能球率 (%)	深切り球率 (%)	損傷球率 (%)
0.02	14.1	100	0	0
0.03	7.3	100	0	0
0.06	4.2	100	0	0
0.08	3.0	100	0	0
0.15	1.6	100	0	0
0.27	0.9	100	0	0

注)トラクタ:TF-153F, エンジン回転数:約1000rpm, 切断部荷重:7kg
レタスの栽植間隔:45cm(うね間)×25cm(株間)



写真2 レタス収穫機の作業状況(後方)

作業には調整作業者と箱詰め作業者の2人が必要で、レタスの切り取りから箱詰めまでの作業がほ場で完了できます。両者とも立ち姿勢で作業ができ、腰を曲げるつらい作業姿勢をしなくて済みます(写真2)。

水稻の種子伝染性4病害防除に 有効な温湯処理技術

農業総合試験場

近年、水稻の種子伝染性病害はかびによる2病害(ばか苗病、苗いもち)と細菌による3病害(もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病)が問題になっています。防除には種子消毒剤が広く使用されています。しかし、環境にやさしい農業を進めるために、農薬に代わる防除方法が求められています。

農事試験場では、その期待に応えることができる技術、すなわち温湯処理(図1)による4病害(ばか苗病、苗いもち、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病)の同時防除技術を開発しました(図2)。

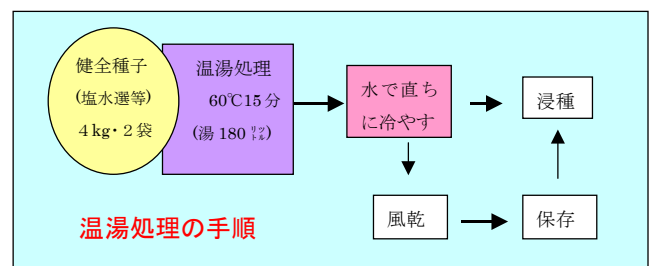


図1 水稻種子伝染性病害防除のための温湯処理法

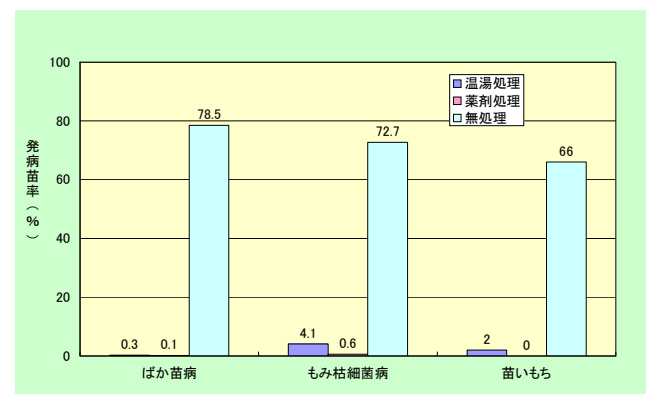


図2 温湯処理による水稻の種子伝染性病害防除効果

効果を発揮させるには、処理米全体の均一加温の精度と処理時間の厳守が必要ですが、専用の温湯処理機を利用すれば、簡便に温湯処理ができます(写真3:民間企業と共同開発し、市販されています)。



写真3 水稻種子の温湯処理機

ぶどう「ロザリオ ビアンコ」用 果実カラーチャート 果 樹 試 験 場

糖度が高く、食味が良好な欧州系ぶどう「ロザリオ ビアンコ」は、消費者に人気が高く、栽培面積が増加しています(写真4)。

しかし、緑黄色系の品種は収穫期の判断がむずかしく、これまでカラーチャートがなかったため、未熟で食味の不良な果実が収穫される場合がみられました。そこで、果樹試験場では、果皮色により「ロザリオ ビアンコ」の収穫適期判定を行えるよう、全農長野県本部と共同で、カラーチャートを作成しました(写真5)。

果樹試験場の試験成績によれば、ハウス栽培の場合に、カラーチャート指数5以上で糖度が20%に、露地栽培の場合には、カラーチャート指数4以上で糖度が19%になり、収穫適期と判断しました。

なお、標高、作型、栽培条件等により、カラーチャート指数と果実品質との関係は若干異なりますので、産地ごとに基準値を決めておく必要があります。



写真4 ロザリオ ビアンコ



写真5 ロザリオ ビアンコのカラーチャート

りんご「ふじ」の密植栽培に適した M. 9ナガノ台木の利用方法 果 樹 試 験 場

りんごでは、作業性や収量性を高める技術として、樹形を小型に抑える「わい化栽培」が注目されており、これまでのりんご「ふじ」のわい化栽培では、マルバカイドウという台木にM. 9ナガノを接ぎ(中間台木)、さらに「ふじ」を接ぐ栽培方法が主流でした。

ところが、この方法は、小型の樹形を長期にわたって維持することがむずかしいという問題をかかえていました。



写真6 M. 9ナガノを台木に利用した「ふじ」の樹形

この問題を解決するために行った研究の結果、「ふじ」のわい化栽培では、マルバカイドウを用いずにM. 9ナガノだけを台木として利用することにより、4m×2mの栽植距離を長期にわたって維持することができ、これまでのM. 9ナガノを中間台木として利用する方法よりも、面積あたりの生産性が高いことがわかりました(写真6、図3)。

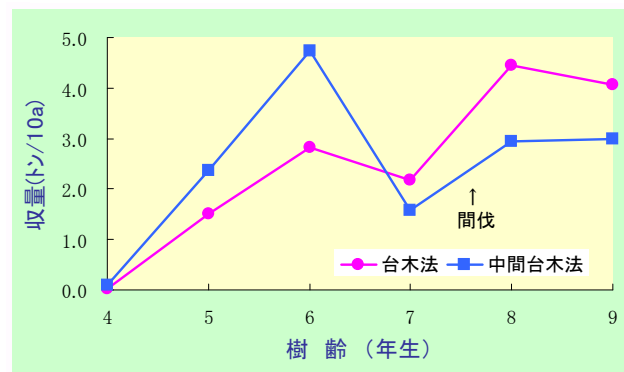


図3 M. 9ナガノ台木の利用方法が「ふじ」樹の収量に及ぼす影響

(栽植距離: 4m × 2m, ただし、台木法は8年生樹を1樹ごとに間伐した)

小輪系アスターの 電照による9～12月出荷技術 野菜花き試験場

小輪系アスターは、従来のアスターに比べて花が小さく、花数が多く、洋花とのアレンジにも適しているので、年間を通して需要があり、近年栽培が増加しています(写真7)。

しかし、小輪系アスターの秋から年内に出荷する作型では早期に開花しやすく、草丈が短くなり、商品価値が劣ることが問題となっています。

従来、小輪系アスターは苗で種苗が供給されていたので、コストの面から摘心をして脇芽を数本伸ばす栽培方法が主流でしたが、最近、種子が販売されるようになり、無摘心栽培が可能になりました。

そこで、野菜花き試験場では、小輪系アスターの「ステラシリーズ」と「ネネローズ」という品種を摘心せずに栽培し、定植直後から電照を行うことにより、9月中旬～12月中旬に高品質な切り花が出荷できる技術確立しました(図4)。

育苗は200穴セル成型トレイで約30日間行い、本葉6～7枚で定植します。

電照は定植時から開始し、75W白熱灯を2.5m間隔(aあたり16灯)で、地面から約1.5mの高さに設置し、16時間日長とします。開花まで電照を行えば、開花期を



写真7 開花期の小輪系アスター

抑制でき、草丈も伸長しますが、出らい期以降の電照は、花が大きくなり過ぎるので、目標出荷時期や切り花品質が確保できた時点で電照を打ち切ります。

いずれの作期でも施設栽培とし、夜温が低ければ奇形花発生の恐れがありますので、最低夜温が15℃以下にならないよう加温します。

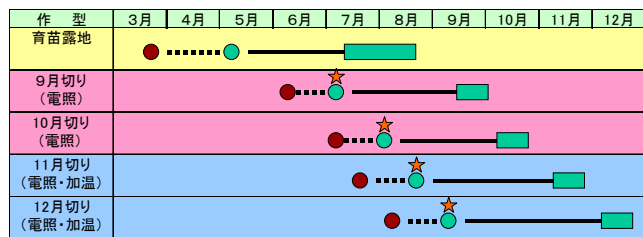


図4 電照による小輪系アスターの9～12月出荷作型

食品製造粕を用いた安価で栄養満点な 高泌乳牛の飼料メニュー 畜 産 試 験 場

食品製造業の副産物（豆腐粕、ビール粕、醸造粕など）には乳牛飼料として利用できる成分が含まれています。しかし、これらは成分や消化性に偏りがあるため、栄養計算に基づいて給与しないと、乳量・乳成分に影響したり、牛の健康を害する場合があります。

そこで、畜産試験場では、他の公立試験場との共同研究によって、穀類や草類の一部を粕類で置き換えて給与する場合の栄養指標を明らかにしました（表2）。

この指標に基づいて飼料給与設計を行うことにより、①高泌乳（最高日量50kg程度）牛の健康を保つことが

表2 食品製造粕を高泌乳牛に給与する場合の
給与飼料全体の栄養指標（乾物中）

エネルギー含量（可消化養分総量）		75～77%
粗タンパク質		17%程度
粗脂肪		5～6%以下
繊維の質と含量	NDF	40～45%
	eNDF	24～26%
炭水化物の質と含量	NFC	27%以上
	可消化炭水化物	46～48%

注）NDF：中性デタージェント繊維、 eNDF：有効NDF
NFC：非繊維炭水化物



写真8 食品製造粕を利用した乳牛飼養

でき、②しかも、粕類は比較的安価に入手できるため、酪農経営にもプラスとなり、③また、資源の有効活用にもつながります（写真8）。

畦畔の省力管理にセンチピードグラス 南信農業試験場

畦畔の管理は、水田の機能維持や農村の景観形成にとって重要ですが、その草刈り作業は、重労働であり、水田営農の大きな問題となっています。

日本在来のノシバは、ほふく茎で畦畔をがっちりと支え、草丈が短く、草刈り労力が少なくすみ、雑草の侵入も少ないため、畦畔の省力管理に最も適した草種といわれています。しかし、ノシバは種子繁殖が困難なので、畦畔全体を芝張りする必要がある、経費や労力がかかり過ぎます。

このような問題を解決するため、導入が容易で、畦畔の省力管理が可能な草種を選定する試験を実施した結果、センチピードグラス（和名ムカデシバ）が有効であることがわかりました（写真9）。

センチピードグラスは、ノシバによく似た東南アジア原産のイネ科多年生植物です。草丈が10～15cmと短く、種子による導入が容易で、定着後は、ほふく茎



写真9 センチピードグラスの畦畔

で増殖します（図5）。いったんマットを形成すれば、雑草の侵入が少なく、草刈り作業の労力を大幅に軽減できます。ただし、寒冷地では越冬できないので、本県では標高700m以下の地帯が適地です。

播種期は5月末～6月が適期であり、播種量は、m²あたり10gとします。播種初年目は、夏雑草が繁茂したら刈り取って再生をはかり、越冬前の生育量を十分に確保します。

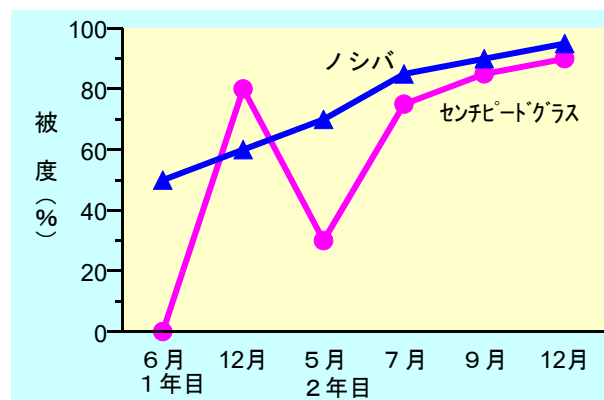


図5 センチピードグラスの導入初期の生育

フロンサイドSCの植付け時処理による ナシ白紋羽病の防除 南信農業試験場

ナシで最も恐ろしい病気の一つに、根を侵す白紋羽病があります（写真10）。白紋羽病は土壌伝染をするので、跡地に新しく苗木を植えても再び白紋羽病菌に侵されて枯れてしまいます。

これまでは、白紋羽病で樹が枯れた跡地は空地になってしまい、土地の有効利用ができないため単位面積当たりの収量が減少してしまいました。



写真10 ナシ白紋羽病の被害
（枠内：根部には白色の菌糸がみられる）

白紋羽病で樹が枯れた跡地にフロンサイドSCの500倍液を1樹当たり50～100リットル植付け時に処理すると、白紋羽病菌の増殖を抑えて、苗木を育てることができます。処理方法は植付けの際に土を埋め戻しながら灌注するか、埋め戻した後に灌注器を用いて注入処理をします（写真11）。



写真11 埋め戻し後の灌注器による注入処理

ニューラルネットワークを用いた レタスとはくさいの球重予測 営農技術センター

従来から、気象データを用いてレタスやはくさいの生育予測を行う試みがされていましたが、品種やマルチの違いにより大きな影響を受けるため、十分な手法とは言い難いものでした。

そこで、最近さまざまな場面で活用されているニューラルネットワークという手法を用いて、レタスとはくさいの球重を予測する方法を検討しました（図6）。

ニューラルネットワークとは、人間の頭脳が持つさまざまな機能をコンピュータ上で実現しようとする演算法であり、順次新しいデータを加えていくことにより予測の精度が上がっていく（このことを「再学習」という）のが特徴です。

今回開発した手法では、レタスとはくさいの球重予測を次のように行います。

レタスでは、気象条件（日平均気温、降水量、日照時間）と栽培条件（マルチの種類、うね間、株間、品種のタイプ、品種名、育苗方法、作数）を入力することにより、ニューラルネットワーク法で球重を予測します。

はくさいでは、気象条件（レタスと同じ）と栽培条件（マルチの種類、うね間、株間、品種）を入力することにより、ニューラルネットワーク法で地上部重を予測した後で、さらに地上部重と球重との回帰式から球重を予測します。

現状では、予測できる範囲が狭い、生育データ数が少なく予測精度が低いといった問題がありますが、今後、生育データを加えていくことによって、ニューラルネットワークによる手法の利点である「再学習」効果により、予測精度を改善していくことができます（表3）。

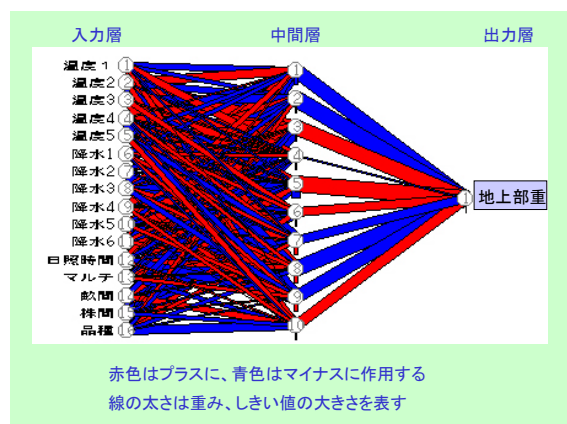


図6 はくさい地上部重予測のためのネットワーク構造

表3 ニューラルネットワークを用いたはくさいの球重予測精度

作型	品種	マルチの種類	地上部重 kg			球重(調整重) kg		
			予測値	実測値	誤差	予測値	実測値	誤差
春育苗	CR清雅65	黒マルチ	3.20	3.79	-0.59	2.22	2.46	-0.24
			3.28	3.57	-0.29	2.17	2.07	-0.10
			3.37	3.61	-0.24	2.00	2.22	-0.22
夏育苗	大福	ムシコンワイド	2.55	2.59	-0.04	1.86	1.78	-0.08
			2.49	2.63	-0.14	1.84	1.73	-0.11
			2.51	2.69	-0.19	1.75	1.82	-0.07
			2.58	2.45	0.12	1.56	1.31	-0.25

注) 予測値：ニューラルネットワーク法で予測した値。

予測精度は今後データを加えていくことによって改善できる。



セルリのポット施肥法による 環境にやさしい栽培技術 農業総合試験場

肥効調節型の肥料を使用して、収穫までに必要な肥料の大部分をあらかじめ培土に混ぜてポットで育苗し、定植する栽培方法を開発しています。この方法により、現行のセルリ栽培における窒素施用量の1/2程度で十分な生育と収量を得ることをめざしています。

近赤外分光分析法による 家畜糞堆肥の品質評価の迅速化 農事試験場

環境にやさしい農業の推進のためには、堆肥中に含まれる肥料成分を勘案した施肥を行う必要があります。また、堆肥の利用を促進するためには、安定した品質の堆肥を生産する必要があります。しかし、堆肥の品質評価には、多大な労力と日数を要するため、簡易で迅速な手法として近赤外分光分析法が注目されています。

現在、全炭素、全窒素、水分、粗灰分等の項目は近赤外分光法により高い精度で測定できるようになっています。今後、堆肥の品質と深い関係にある腐熟度や、植物に利用可能な窒素量を示す可給態窒素などの測定法について検討していく予定です。

草生栽培と樹園地土壌の硝酸性窒素 果樹試験場

平成11年から、清耕管理と草生管理で樹園地の土壌中の硝酸性窒素濃度がどのように異なるのかについて調査してきました。これまでの調査結果では、冬季間も含めて、草生管理をしている樹園地の土壌中の硝酸性窒素濃度は、清耕管理の場合の約半分でした。今後も継続して調査し、果樹栽培における草生管理の意義を明らかにし、環境にやさしい農業の推進に役立てていく予定です。

レタス「根腐病」のレース検定法と 耐病性品種の開発 野菜花き試験場

長野県内に発生しているレタス根腐病の病原菌は、洗馬系統の「レース1」と川上系統の「レース2」の2系統に分化しており、この2系統は、耐病性のレタス品種に対して異なる病原性を示すことを明らかにしました。また、市販のレタス3品種を用いる生物検定法を確立し、耐病性品種を適切に導入するための病原菌系統(レース)の判別が簡易にできるようになりました。

飼料用ソルガムの除草剤を使用しない栽培法 畜産試験場

飼料作物を栽培するときの雑草防除は、環境への影響を配慮して、できるかぎり除草剤に依存しない技術が求められています。

そこで、ソルガム「葉月」を散播・密植栽培した結果、除草剤を使用しなくても、十分な生育と収量を確保することが可能でした。今後、作期の検討、冬作物の導入等により、技術確立を図っていきます。

栽培管理の省力化に有効な 短節間ミニトマト系統の育成 中信農業試験場

トマトは草丈の伸長とともに下位節から上位節に向かって順々に果実をつける性質があるため、施設栽培では一定の高さを超えると、植物体を下げる作業を行います。その作業は、栽培期間が長くなるほど多くの時間を要します。

そこで、このような作業の省力化や収穫作業の軽労化に役立つように、節間の短いミニトマトの品種を育成しています。

土壌の不良化を防ぐ 塩類集積回避型肥料の利用 南信農業試験場

化学肥料に副成分として含まれている硫酸イオンや塩素イオンは、土壌に集積し過ぎると酸性化や塩類濃度障害の原因となります。

そこで、これらの副成分を含まない肥料(塩類集積回避型肥料)が開発され、特に障害の発生しやすい施設土壌等での利用が検討されています。当場では、場内試験で雨よけ栽培のアスパラガスに対する有効性を実証し、現在、農家の圃場で適応性試験を行っています。

ハクサイベと病対策 営農技術センター

ハクサイベと病は、夏季のはくさい生産で大きな問題となっています。当センターでは、べと病に強い品種の選定と防除効果の高い薬剤の選定を行っており、複数の方法を組み合わせた、総合的なハクサイベと病防除法の確立をめざしています。

長野県農業関係試験場の所在地とホームページアドレス

○農業総合試験場	〒382-0072 須坂市小河原492	026-246-2411	www.janis.or.jp/agri-or/narc/
農業機械部	〒381-1211 長野市松代町大室2206	026-278-5550	
バイオテクノロジー部			
○農事試験場	〒382-0072 須坂市小河原492	026-246-2411	www.agri-exp.pref.nagano.jp/
作物部	〒382-0051 須坂市八重森下沖610	026-246-9783	
育種部			
原村試験地	〒391-0100 諏訪郡原村向坂上3853-3	0266-79-2713	
○果樹試験場	〒382-0072 須坂市小河原492	026-246-2411	www.janis.or.jp/agri-or/nftes/
○野菜花き試験場	〒381-1211 長野市松代町大室2206	026-278-6848	www.dia.janis.or.jp/~yakashi/
○畜産試験場	〒399-0711 塩尻市片丘10931-1	0263-52-1188	www.chikushi.pref.nagano.jp/
○中信農業試験場	〒399-6461 塩尻市宗賀床尾1066-1	0263-52-1148	www.chushin-exp.pref.nagano.jp/
○南信農業試験場	〒399-3103 下伊那郡高森町下市田2476	0265-35-2240	www.janis.or.jp/users/nannoshi/
○営農技術センター	〒384-0081 小諸市山浦4857-1	0267-25-3080	www.janis.or.jp/users/einogi-c/